

# 福島県立安積高等学校

## 第127期生卒業証書授与式 式辞

日 時 平成26年3月1日  
場 所 福島県立安積高等学校第一体育館

### 式 辞

春めく陽射しが学舎に降り注ぐようになり、安積野の太地にも少しずつ躍動の気が満ちてきた今日の佳き日に、県議会議長代理者の県議会議員勅使河原正之様を始め、御臨席いただきました御来賓の皆様方に、卒業生の前途を祝福していただき、第127期生卒業証書授与式を挙行できますことは、卒業生はもとより、職員・生徒一同この上なき喜びと感じており、深く感謝申し上げます。

保護者の皆様には、卒業式に臨むお子様の晴れ姿を御覧になり、お喜びもさぞかしのことと、心からお祝い申し上げます。また、これまで本校教育の推進に、御協力、御支援を賜りましたことに改めて心から感謝申し上げます。

卒業生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんは、3年間に亘る安積での学びの時を過ごし、栄えある127回目の卒業生として巣立つことになりました。しかし、皆さんが飛び込むとしている社会は、東日本大震災後の厳しい社会です。

皆さんは、3年前の3月11日、中学校の卒業式が行われた日、長い人生の中でも数少ない、正に「晴れの日」に東日本大震災を経験し、大震災後に高校に最初に入學して3年間の高校生活を送り、最初に卒業するという、謂わば「大震災後の高校一期生」とも言えるでしょう。大地震・大津波と、それに続く東京電力福島第一原子力発電所の事故は、多くの日本人の価値観を変えるほどの大きな出来事でした。事故発生当時とその後の事情については、当時浜通りにいた人もいれば中通りで被災したというように、皆さんそれぞれ異なっていると思いますが、大震災は皆さんの高校生活に何らかの影を落としてきたのではないのでしょうか。

あと10日で丸3年が経過しようとする中、大震災が落とした影は、少しずつ少しずつ薄くなってきたようにも思えますが、復旧が進んだ部分もある一方、福島県は真の復興に動き出しているとは言えない厳しい状況が続いています。原発立地町村の中学校には、あの日の卒業式の看板がそのまま残されています。大震災とその後の原子力災害を経験した私たちは、「ふくしまは、日本は、そして世界はこのままでよいのか、今後、どう在るべきなのか」という、本質的で、かつ非常に大きな難問に向き合っていかなければなりません。大震災以降、「ふくしまのために何かをしたい、ふくしまの復興に自分の学びを活かしたい。」このように考える高校生が増えています。勿論、世界へ飛躍しようとしている生徒も大勢いるわけですが、その場合でも、「3.11以降のふくしま」を心にとめて、できれば福島の地にしっかりと足をつけて活躍してほしいと願っています。

さて、校長として私はこの1年間、志を高く掲げる生徒諸君に様々なメッセージを発信し続けてきました。

主なものを挙げると、

○ 頭はいつも冷えていなくてはならない（冷静さ・集中）

目はいつも澄んでいなくてはならない（謙虚・誠実・純粹）

心はいつも燃えていなくてはならない（志を達成する強い気持ちを持って）

○人間として高校生として、当たり前なのが当たり前にできる自らを律する生徒に

○安積という学びの苑には、素晴らしい教師、素晴らしい仲間がいる。しかし、学ぶこと、生きることは、最終的には孤独な営みであり、たくさんの選択肢の中から唯一つを選び取

る決断をたった一人でする、それを絶えず繰り返すことが生きることなのだと語りかけました。その際に紹介したのが「人それぞれ書を読んでゐる良夜かな」という山口青邨の句。  
○正岡子規に生涯兄事し、ホトトギス派の伝統俳句を支えた俳人高浜虚子の、「去年今年貫く棒の如きもの」を紹介したこともありました。

今日は、改めてこの句について語りたいと考えています。この句は、去年から今年にかけて、何か棒のようなものが一本貫いているという、実に簡潔で、かつ映像を喚起する力を持っています。この「棒」は一般的に「個人の生活信条や信念」或いは「一貫性のある時の流れ」と解釈されており、「まっすぐで変わらない確固たるもの」という印象を与える言葉です。安積で学んできた君たちにとっての「棒の如きもの」、その真ん中にあるのは、言うまでもなく安積の精神、「開拓者精神、質実剛健、文武両道」であるはずです。ただ、これは一朝一夕にできたものではなく、100年以上の長い時をかけて揺るぎないものになったはずです。それらは、ただ何もせずを得られるものではなく、常に先輩達から学び取るものであり、また、卒業後もこの太い棒の如きものを自分自身の中に持ち続けてください。思うにそれは、皆さんそれぞれにとっての「覇権の剣」となり得るものです。人生の節目節目で「去年一年、自分の信念は揺るがなかったか、自分の言動はぶれることなく一貫性はあったのか」そのような問いを絶えず自らに投げかける人になってほしいと願っています。

卒業生の皆さん、君たちは安積高校創立127年目に入学、同期生と共に、128年、129年と安積の時間を刻んできました。この安積で、場所・時間や言葉・記憶を共にし、勉学に励み、部活動で仲間の大切さを実感し、紫旗祭でクラスが一つになり、安積の空気を胸一杯吸い込み、「安積」という学校文化を3年間共有してきました。正に安積の誇り・プライドを身につけたのだと私は考えます。

お互いのことを知らなくても、過ごした時代が少し違っていても、安積という文化を「同じくする」ということが、安積を母校とする人と人とを結びつけてきたのであり、それはこれからもずっと変わらないはずです。

皆さんは、卒業後も更に多くの人々と出会い、関わりながら生きていくことになります。どうか、奇跡としか言いようがない出会い・巡り会いを大切にし、夢の実現を目指して、常に謙虚で誠実であることを心がけ、感謝の気持ちと思いやりの心を持って歩んでください。

学校に残る私たちは、安積の良き校風と伝統をさらに揺るぎないものとし、益々地域に信頼され、「七州の覇者」という名に相応しい安積高校にすることを決意して、皆さんを笑顔で送り出したいと思います。

皆さんの前途洋々たる未来を祝し、皆さんが、その澄んだ瞳に大きな翳りを宿すことなく、充実した幸多き人生を歩んでいくことを、そして、それぞれにとっての「覇権の剣」をしっかりと握ることができることを祈念して式辞といたします。

平成26年3月1日

福島県立安積高等学校長 久保田範夫

【古今集】 春霞たてるやいづこみよしのの

吉野の山に雪は降りつつ（読み人知らず）

立春とともに立つはずの見えない霞に憧れる心

【新古今集】 折られけりくれなゐにほふ梅の花

けさ白たへに雪は降れれど（宇治前関白太政大臣）（藤原頼通・道長の子）